

## 流動と占拠——寄せ場の空間思想をめぐる

世話人氏名 友常勉（東京外国語大学）

各報告者とテーマ

- ・「炊き出しと流動的下層人口の関係性」（持木良太、大阪府立大学）
- ・暴動の時間を領有する——寄せ場暴動と東アジア反日武装戦線（友常勉、東京外国語大学）
- ・「ふたつの「労務者」論——船本洲治と寺島珠雄」（原口剛、神戸大学）

討論者氏名 マニュエル・ヤン（早稲田大学）

このパネルでは、戦後社会運動論と公共空間論のなかに寄せ場の運動を位置づけなおすために、1970年代前半の寄せ場における「暴力手配師追放釜ヶ崎共闘会議」「悪質業者追放現場闘争委員会」の実践の意味とその可能性を、とりわけその空間をめぐる思想に重点を置くことで、現代の観点から捉え返すことを目的とした。

その際、想定されていたのは次の三つの論点である。第一の論点は、寄せ場の活動家であった船本洲治が提起し実践した「流動」と「占拠」を中心要素とした空間の思想である。寄せ場における越冬闘争は1960年代末から実践されていたが、その意義を正面から論じたのは船本洲治が初めてである。その言葉は公共空間で行われている今日の炊き出しや、反五輪の実践に代表される反排除闘争の意味を考えるうえでいまなお重要である。寄せ場における炊き出しをめぐる思想の断片に光を当てながら、船本が思想として提起した生存闘争、占拠、「黙って野たれ死ぬな」というスローガンの意味を再検討する。

第二の論点は、寄せ場暴動が有する「周期性」と、その特異な時間軸を踏まえて暴動の時間に重ね合わせようとする実践の意味である。1968年には、船本洲治や鈴木国男が参加することで、寄せ場の運動においても重要な転機が訪れるが、とりわけ「山谷解放委員会」が「起爆剤」として第9次・第10次暴動が発生した点で重要であった。これは、あたかも自然的で偶発的な周期性の法則にしたがって生起する暴動を、意識的に組織しようとして成功した事例である。しかしまた同時に、組織化とは無関係に第11次暴動が発生したことから、暴動は常に潜在的に発生しているという認識が活動家たちのあいだに生まれた瞬間でもあった。ここから、暴動の周期性に重ね合わせる実践の先に、時間と空間を領有する対抗的な運動の展望が拓かれたと断言したい。そのことの意味を東アジア反日武装戦線の思想にまでつないで考えてみたい。

第三の論点は、「流動」と「占拠」にかかわって、それぞれの「労務者」論を提起していた船本洲治と寺島珠雄の思想を検討することである。1968年の「6・17裁判」、1971年の西成労働福祉センター焼き打ち事件第一回公判で、労働者が「労務者」と区分されることで明らかになった差別を、寺島珠雄を指摘している。他方、船本洲治は「労務者」という語について、その流動性に注目することで積極的な意味を与えた。二つの「労務者」論の差異は、寄せ場の空間思想に引き寄せて考えてみることで、現代的な問題提起とすることを期待した。

報告①「炊き出しと流動的下層人口の関係性」持木良太（大阪府立大学大学院）

持木報告は、まず、「ルンペン化した労働者」という資本主義生産過程の労働からはじき出された者たちが闘争主体となることへの「疑義」の存在を問題提起とする。はじき出された者たちの「面倒をみる」のは行政の仕事であり「偽善」であるという規定において、テント村の設営や炊き出し自体は「福祉」の領域とみなされる。これは、労働者内のうちに「働けるもの／働けないもの」という分裂をもたらし、さらにそれが「労働者内部の混乱」とみなされることになる。こうした労働者／非労働者という分断過程に直面したとき、70年代の船本洲治のような寄せ場の活動家は、労働者を組織するには既成の方法では行えないこと、組織する対象は人間、労働者ではなく「叛乱」という立場を提起した。そこには谷川雁の組織論からの影響もうかがえるが、生存闘争という範疇としての「黙って野たれ死ぬな」というスローガンが、労働者内部に分割線を引くことなく、労働者／失業者の連続線を見いだすことであった。そしてそれは、労働者の主体の拠り所、労働現場を基軸に据えるのではなく、衣食住という「日常」を基礎に据えることであった。ここには、仲裁や結束や親交を目指す時に、ひろく食べることが選ばれること、人々が共に食べる営みとは、少なからず共同意識を醸成するという事が前提にある。同じ組織に属している者たちや、仲を取り直す必要がある者たちが食を共にするのは、嗜好やイデオロギーだけによる頭脳の認識だけでは、共同意識を育むには不十分であること、切り分けられた断片としての未組織労働者の連なりを、「食」によって紡ぎ、生の運動として「食」があつてほしいという構想が幾分か含まれていたのではないかと提起した。

報告②「暴動の時間を領有する——寄せ場暴動と東アジア反日武装戦線」（友常勉、東京外国語大学）

友常報告は、1960年代後半の山谷暴動が、暴動と「単独者」のアポリアをめぐる認識論的転回をもたらしたことを、1968年6月15日第九次暴動・同17日第一〇次暴動をめぐる竹中労のレポートに用いて問題提起した。自然発生的でときに「自然史的」でさえある暴動は、活動家や組織者を丸裸の「単独者」として露出させてしまうというアポリアをはらんでいる。このことは、船本洲治の死後、その思想の継承をはかった山岡強一において強く意識されていた。意識的に形成された組織を不要とする暴動の論理は、しかし、組織なくして、決起する単独者や「狂人」が守れないという矛盾を抱えるのである。したがって暴動論とは組織論と不可分である。この点で、詩／資本の価値転換から媒介者へと展開した谷川雁の認識論的軌跡は再考される必要がある。谷川は、民衆を「ほんとうの虎」＝「負の工作者」として把握し、非組織者・生活者が有する「現代のファシズムをはじめもろもろの蛇やなめくじが発生する幅をもった地帯」と、その反動的エネルギーに注目したからである。だが、谷川雁には、1979年6月9日に単身決起して山谷のマンモス交番の警官刺殺をおこなった「6・9闘争」の磯江洋一のような深い絶望感を共有していたとはいえない。

前衛党型の組織論ではなく、「加担者」の意識の徹底という報告から〈組織化〉を考えた先駆的な考察に、1964年に発表された、「加担者の認識の方法」についての佐々木祥二の論考がある。それは、対面関係なき加害 - 被害関係を超克する具体性（数字、名前）をあげることで、加害者＝加担者としての意識を減退させることなく、加担の構造への攻撃への転換をはかる思考実験であった。いわば、加担者の認識の自然的な深化拡大ではなく実践者へ踏み出すことの提起である。そこには「70年七・七華青闘告発」以前の良質の植民地戦争責任論があり、のちの東アジア反日武装戦線の思想を先取りしていた。さらにまたここに、山岡強一が直面していたアポリアを考えていくための手がかりがある、と提起した。

報告③「ふたつの「労務者」論——船本洲治と寺島珠雄」（原口剛、神戸大学）

原口報告が問いかけたのは、繰り返し語られる「釜ヶ崎」と、語られることのない「釜ヶ崎」の差異であり、そこには、権力が、空間を狭く封じ込めようとするのに対して、運動は、可能な限り遠くまで空間を拡げようとする、その遠心的記述の多様な方法と経路を提起することである。

この記述的な実践の系譜を、船本洲治の流動的下層労働者論における流動性と闘争主体の自由性・全国性の二重性から、さらに、労働者と労務者といういいかえに着目した寺島珠雄の試みから読み取ろうとした。「けがされてしまった」労働者という言葉に対して、労務者には「差別されている者の反抗、反乱の自由は確保する」（労務者渡世編集委員会）という認識があり、船本は同時期に「われわれの基本的思想は、人民に対しては《労務者こそが未来をわがものとするところの労働者である》ことを公然と宣言し、白豚どもに対しては《労務者としての特殊な存在状況を奴らを打倒する武器に転化する》」という理解にもとづいて、「労務者」にその内容を付加していた。

しかもそれによって、北海道の下層労働者、火力発電建設反対闘争にたちあがるアイヌ漁民、反CTS基地闘争の沖縄の農民・漁民、そして日韓条約後の韓国の人々のとの連帯の質をも、労務者という自己規定から導き出そうとしたのである。それが、寺島がいう、「釜ヶ崎は釜ヶ崎だけですでに掘り起こせば日本と世界のあらゆる問題に通じる現象を十分に所有している」という認識の回路を形成していた。歴史認識においても、「トンコの語源」を、戦中戦前の炭坑における朝鮮人労務者に由来するのではないかという直観につながっている。また、上野英信の次の言葉もこうした主体把握の系譜に連なっているだろう。「ケツワリとは逃亡・脱走の意であり、動詞としてはケツをワルというふうに使われている。ケツワリ坑夫といえば脱走坑夫のことになる。よく尻割という漢字が宛てられるけれど、これはバケツを馬穴と書くのと同じく、まったくの宛字にすぎない。もともと脱走を意味する朝鮮語の「ケッチョガリ」の転訛であることは明らかだ」。

原口報告はこうした言語をめぐる攻防のなかに、寄せ場／寄り場を取り戻す契機をつかみとる暴動・蜂起の世界誌（史）の記述の可能性、実際の運動形成の経験（「寿町 - 笹島」にみられる）、そして日常的に流動を生み出し、空間を食い破る地図をつくりだす実践の可

能性がよみとられうるとした。

ディスカッションでは、ブラック・パンサーのジャクソン兄弟の経験などを参照したマニユエル・ヤン氏の提題などによって、暴動・蜂起の歴史記述に向けて、議論を開いていくための論点が共有することができた。(友常勉)